

# 1940年代初期ロサンゼルスにおける メキシコ系米国人若者集団の状況

二 瓶 マリ子

## Summary

This paper examines the social conditions of Mexican American youths of the 1940s, particularly of a group known as the pachucos. Pachuco is a term that refers to working-class Mexican American male youths who wore zoot suits in southwestern cities during the 1940s. Often seen as gangsters by mainstream Los Angeles the pachucos became increasingly marginalized in the city.

Thirty years later during the 1970s many ethnic groups began to undergo a phenomenon known as ethnic revival or an awakening of their own ethnicity. Under this influence, some Mexican American intellectuals and artists such as Luis Valdez and Ruben Salazar recognized the pachuco as the origin of Mexican American consciousness.

Why did some Mexican Americans of the 1970s equate the pachucos with their ethnic origin in spite that they were terribly feared and despised a generation ago? There were several Mexican heroes such as Pancho Villa and Emiliano Zapata who could be used as the origin of ethnic consciousness. But why did the pachucos feature as the roots of this ethnic awakening?

This paper deals with this question by looking at the relationship between pachucos and other ethnic groups in Los Angeles during the 1940s. It does so, by analyzing two historical incidents that involved pachucos: the Sleepy Lagoon murder in 1942 and the Zoot Suit Riots of 1943.

## はじめに

戦時下の1940年代初期、ロサンゼルスには、ズート・スーツを身につけたメキシコ系米国人労働者階級の若い男たちがいた。<sup>1)</sup>パチューコ (pachuco) と呼ばれた彼らを、周囲の人びとは「ギャング集団」とみなし、疎外していたのである。それから約30年後の1970年代、米国では、エスニック集団がそれぞれに特有の「ルーツ」を探し求める動きが活発化した。エスニック・リバイバル (ethnic revival) として知られるこの潮流のもと、複数のチカノ芸術家・知識人は、パチューコに自らのエスニシティのルーツを求めた。<sup>2)</sup>彼

<sup>1)</sup> オリジナルのズート・スーツ・スタイルは、肩幅が広く丈がひざまであるジャケット、足首までは幅が太く足首の部分で幅を狭めたプリーツのズボン、ベストから提げて膝のあたりまでくる長いチェーン、そして帽子の組み合わせたものである。ズート・スーツは、踊りに適したファッションでもある。

<sup>2)</sup> 本稿では、「メキシコ系米国人」と「チカノ」を次のように区別する。「メキシコ系米国人」はメキシコに出自を持つ人びと全般を指す。一方「チカノ」は、アングロ系とは異なる対抗的アイデンティティを探究し、村田が言うところの『「一枚岩のわれわれ」という自己イメージ」を持って団結するメキシコ系米国人を指す。個人によって「チカノ」の定義が違うので、本稿の使い分けは適応しない場合もある。村田勝幸『〈アメリカ人〉の境界とラティーン・エスニシティ―「非合法移民問題」の社会文化史』(東京大学出版会、2007年)、222頁。

ら曰く、パチューコは、「チカノよりも先にアングロ系米国人への抵抗を表明し、メキシコ系米国人独自のアイデンティティを形成した」集団であった。<sup>3)</sup>このような主張を明示した代表的な例が、チカノ劇作家ルイス・バルデス (Luis Valdez) の演劇・映画作品『ズート・スーツ』(Zoot Suit、演劇 1978 年、映画 1981 年) である。この作品は、1940 年代のロサンゼルスで起きた 2 つの事件——スリーピー・ラグーン殺人事件 (Sleepy Lagoon murder, 1942 年) とズート・スーツ暴動 (Zoot Suit Riots, 1943 年) ——で、人種差別の対象となったパチューコたちの苦闘を描いている。

なぜ 1970 年代、バルデスをはじめとするチカノ知識人たちは、自らのエスニシティのルーツを、ピジャ (Pancho Villa) やサパタ (Emiliano Zapata) などの英雄的なメキシコ人ではなく、1940 年代当時蔑視の対象だったパチューコに求めたのであろうか。ラミレス (Catherine S. Ramírez) やペレス・トーレス (Rafael Pérez-Torres) が、反社会的で独自のスタイルを保持していたパチューコをチカノのエスニシティの象徴として評価するように、既存の研究では、パチューコ・スタイルの独自性が強調されてきた。<sup>4)</sup>しかしながら、1970 年代のチカノがパチューコにルーツを求めた要因は、パチューコ・スタイルの独自性ばかりでなく 1940 年代に発生した 2 つの事件にもある、ということは等閑視される傾向がある。そのため本稿では、スリーピー・ラグーン殺人事件とズート・スーツ暴動に注目し、パチューコが直面していた 1940 年代の社会状況を再検討する。

本稿は四節から構成される。第一節では、パチューコの起源をたどる。第二節では、パチューコと彼ら以外のびとにとってのズート・スーツの意味を検証する。第三節では、移民に対する排斥感情が高まっていた戦時下のもとの発生したスリーピー・ラグーン殺人事件を検討する。第四節ではズート・スーツ暴動を考察する。資料は、スリーピー・ラグーン弁護委員会の報告書 (Sleepy Lagoon Defense Committee Records) を重視することで、ロサンゼルス社会におけるパチューコの位置を浮き彫りにする。<sup>5)</sup>

## 1. パチューコの起源

### (1) 1940 年代以前の「パチューコ」

「パチューコ」という名称は、どの時代、誰が、誰に対して使用するのかによって意味が違ってくる。この名称は、1940 年代以前、ロサンゼルスの子メキシコ系米国人の間では「エルパソ」という地名や「エルパソ出身者」という集団名として認知されていたが、ア

<sup>3)</sup> 例えば、メキシコ系の新聞記者サラサル (Ruben Salazar) は、「パチューコ・フォーク・ヒーローズ——最初に違ったのは彼らだ」という題の記事の中で、独特のスタイルを身につけることで主流社会に抵抗したパチューコを評価した。Ruben Salazar, "Pachuco Folk Heroes — They Were First to Be Different," *Los Angeles Times*, July 17, 1970. 同様にパチューコを評価した芸術家・知識人には、モントヤ (José Montoya) やピジャヌエバ (Tino Villanueva) などがある。パチューコに対するこのような評価は、女性ではなく男性の間で特にみられた。

<sup>4)</sup> Catherine S. Ramírez, "Crimes of Fashion: The Pachuca and Chicana Style of Politics," *Meridians: Feminism, Race, Transnationalism*, 2, no.2 (Spring 2002): 1-35; Rafael Pérez-Torres, *Mestizaje: Critical Uses of Race in Chicano Culture* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2006).

<sup>5)</sup> Sleepy Lagoon Defense Committee Records, 1942-1945, Department of Special Collections, University of California at Los Angeles (以下SLDC Records).

ングロ系米国人の間ではほとんど認知されていなかったようだ。<sup>6)</sup>

オブレゴン・パガン (Eduardo Obregón Pagán) によると、1940年代以前の「パチューコ」は、もともとエルパソで麻薬密売などをしていたティリリ (tirili) と呼ばれる集団を指していた可能性が高いという。<sup>7)</sup> 彼らは、ダック・テイル (duck tail) の髪型をして、派手な衣服を着ていた。<sup>8)</sup> また彼らは、仲間内でのみ通じる独特の言葉カロ (caló) を使用しており、このカロで「パチューコ」は「エルパソ」を意味していた。<sup>9)</sup> 「パチューコ」という言葉は、ティリリがカリフォルニアに移住したさい、「私はパチューコ出身だ」と名乗ることで広まっていった。そして、次第にそれは、カリフォルニアにおいて「エルパソ出身者」という意味を帯びていった。1940年代初期になると、さらにパチューコの意味は変化し、以下でみるように「ズート・スーツを着たメキシコ系米国人若者男性」を示す名称になった。

## (2) ズート・スーツの流行

1930年代の米国では、ジャズの中でもスウィングという新しい音楽スタイルが生まれ、大都市で流行した。都市に住む労働者階級の若者たちの間では、このスウィングと並行してズート・スーツと呼ばれるファッションも流行を見た。

ズート・スーツの起源は不明である。1943年6月11日の『ニューヨーク・タイムズ』紙によると、ズート・スーツは1940年にジョージア州で誕生したという。<sup>10)</sup> 一方マルコム Xは、1940年のボストンで既にズート・スーツが流行していたと述べる。<sup>11)</sup> 近年のアルフォード (Holly Alford) の研究によれば、ズート・スーツは1930年代末の米国東海岸に生まれ、スウィングの音楽とともに東海岸から西海岸へと伝わったという。<sup>12)</sup> そしてそれは、エルパソとデトロイトではアフリカ系とメキシコ系、ニューヨークではプエルトリコ系とアフリカ系、ロサンゼルスではアフリカ系、フィリピン系、メキシコ系、アイルランド系の若者たちの間で流行した。<sup>13)</sup> このように人種・民族に関わらずズート・スーツを着た若者たちを、周囲の人びとはズート・スター (zoot suiter) と呼んだ。つまりズート・スー

<sup>6)</sup> Beatrice Griffith, *American Me* (Boston: Houghton-Mifflin, 1948), 55; Haldeen Braddy, "The Pachucos and Their Argot," *Southern Folklore Quarterly*, 14, no.4 (December 1960): 256.

<sup>7)</sup> Eduardo Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon: Zoot Suit, Race, & Riot in Wartime L.A.* (Chapel Hill & London: University of North Carolina Press, 2003), 37. ティリリはティリジェント (tirillento) の短縮形で「派手に着飾った」という意味。Braddy, "The Pachuco and Their Argot," 261.

<sup>8)</sup> ダック・テイルは、髪をアヒルの尾に似せて後ろで重ね合わせた男性の髪型。ティリリが着ていた洋服がズート・スーツであったかどうかは定かではない。Griffith, *American Me*, 46.

<sup>9)</sup> カロは、スペインからメキシコに来たジプシーの闘牛士が使用していた言葉に由来する。Rafael Jesús González, "Pachuco: The Birth of a Creole Language," *The Arizona Quarterly*, 23 (Winter 1967): 350.

<sup>10)</sup> "Origin of the Zoot Suit," *New York Times*, June 11, 1943.

<sup>11)</sup> Malcolm X, *The Autobiography of Malcolm X/ With the Assistance of Alex Haley* (New York: Grove Press, 1966), 59-62.

<sup>12)</sup> Holly Alford, "The Zoot Suit: Its History and Influence," *Fashion Theory*, 8, no.2 (June 2004): 228.

<sup>13)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 116; Anthony Foster Macias, "From Pachuco Boogie to Latin Jazz: Mexican Americans, Popular Music, and Urban Culture in Los Angeles, 1940-1965" (Ph. D. diss., University of Michigan, 2001), 41.

ツは、1930年代末から1940年代半ばに、米国東海岸と西海岸を中心とした都市に住む労働者階級マイノリティ集団の若者の間で流行した服装であったといえよう。

### (3) ズート・スーツを着たメキシコ系米国人男性、パチューコ

「親や教師、警察のしきたりに反抗していた」メキシコ系の若者にとって、エルパソ出身者に特有の言葉カロや髪型ダック・テイルは反社会的で魅力的なものであった。<sup>14)</sup>そのため、ロサンゼルスに住む労働者階級メキシコ系の若者たちは、エルパソ出身者のスタイルを次第に真似するようになっていった。1940年あたりからズート・スーツが流行すると、メキシコ系の若者はそれも身につけ始めた。このようにエルパソ出身者のスタイルを取り入れたメキシコ系米国人のズート・スターを、ロサンゼルスの人びとは、次第にパチューコと呼ぶようになっていった。<sup>15)</sup>

当時のズート・スーツの平均価格は45-75ドルであり、きわめて高価だった。<sup>16)</sup>そのため、労働者階級の若者がズート・スーツ一式を揃えるのは難しく、多くのパチューコはスタイルの一部だけを身につけていた。当時、ロサンゼルス東部に住むメキシコ系の若者に対して福祉活動を行っていたグリフィス (Beatrice Griffith) の報告によると、1940-45年のロサンゼルスにおいて、メキシコ系労働者階級の若者全体のうち3分の2はズート・スーツ・スタイルの一部だけを身につけていたという。<sup>17)</sup>

ロサンゼルスでは、ズート・スーツを着るメキシコ系の若者が増加するにつれ、彼らに対する非難が強まっていった。当時、ロサンゼルスは戦時下にあったため、市民の連帯を乱すと思われる移民集団への排斥感情は高まっていた。また、1942年3月、政府は男性用スーツ一般に使用する布地の量を規制するL-85を発令したが、パチューコたちはこれを遵守しなかった。<sup>18)</sup> 周囲の人びとは、法律を守らず娯楽を享受するパチューコに対して、次第に不満を募らせていった。

## 2. ズート・スーツの意味

### (1) 「我われ」のズート・スーツ

ビジャレアル (José Antonio Villarreal) は『ポチヨ』 (*Pocho*, 1959) で、1940年代にカリフォルニア南部からサンタクララに移動してきたパチューコの一団について、次のように述べている。

<sup>14)</sup> Griffith, *American Me*, 46.

<sup>15)</sup> パチューコの大半は、12-25歳の若者であった。“De la represión al éxito,” *Tiempo*, 30 de octubre de 1978.

<sup>16)</sup> Alford, “The Zoot Suit: Its History and Influence,” 231.

<sup>17)</sup> Griffith, *American Me*, 15, 45. ロサンゼルス郡保護監察局のホルトン (Karl Holton) の報告によると、40年代前半、ロサンゼルスには、6-18歳までのメキシコ系米国人が約3万6千人いた。Karl Holton, “Delinquency in Wartime,” 3, SLDC Records, box4, folder11. エスコバル (Edward J. Escobar) の報告によると、1940年代前半ロサンゼルスにおけるメキシコ系米国人の総人口は、約13万3千人であった。また彼によると、1941年におけるメキシコ系一世帯の平均年収は790ドルであった。Edward J. Escobar, *Race, Police, and the Making of a Political Identity: Mexican Americans and the Los Angeles Police Department 1900-1945* (Berkeley: University of California Press, 1999), 166-68.

<sup>18)</sup> “Originator of Zoot-Suit Hides His Identity,” *Nebraska State Journal*, June 11, 1943.

彼ら（パチューコ）は、彼らがアメリカ人と呼ぶ人びとを激しく軽蔑した。そして、古い習慣を持つ彼らの両親とメキシコを見下した。前者の感情は、カリフォルニア南部で育ったメキシコ人に顕著な劣等感の表れである。後者の感情は、自分を肯定するための代償である。彼らは、何かに優越感を抱く必要があった。そのため彼らは2つの文化から孤立し、彷徨える集団になった。違うものになろうとする願望が強いあまり、彼らは新しい服装、新しい習慣、新しい言葉を身につけた（括弧内筆者）。<sup>19)</sup>

パチューコは、ズート・スーツやカロなどといった独自のスタイルを身につけることで、彼らを拒絶した米国主流社会と、メキシコの価値観・文化を保持する親の世代への対立感情を表わした。2つの文化の間でディレンマに陥ったパチューコは、それを克服するために独自のスタイルをうみ出したのであった。

また、『ポチョ』やスアレス（Mario Suárez）の「キッド・ソピロテ」（“Kid Zopilote,” 1947）では、普通のメキシコ系の青年が努力してパチューコと同じ服装・習慣・言葉を身につけることで、排他的なパチューコの集団に仲間入りする様子が描かれている。<sup>20)</sup>ここから窺えるように、パチューコたちは同一のスタイルを共有することで、集団の仲間意識を形成していた。

パチューコは、ズート・スーツを着用しないメキシコ系の若者をスクエア（square）と呼び、軽蔑した。彼らは、『『かっこよい』自分たちと『まじめな』スクエアを区別することで、階級ではなくスタイルや個人の資質に基づいた社会的ヒエラルキー」を構築したという。<sup>21)</sup>パチューコにとってズート・スーツは、自らを特権的存在へと位置づける象徴的記号であったといえよう。<sup>22)</sup>

## (2) 「彼ら」のズート・スーツ

戦時下の米国経済は好況を呈し、メキシコ系の若者たちはファッションや余暇に時間と

<sup>19)</sup> José Antonio Villarreal, *Pocho* (New York: Anchor Books, 1959), 149. これは、ビジャレアルの幼少時代の経験に基づいて書かれた著作であり、カリフォルニア州サンタクララで大恐慌時代に生まれ育ったメキシコ系の主人公リチャードが、文化の違いや世代間の対立などと葛藤しながら成長していく様子を描いている。パチューコに対するビジャレアルのこのような見解に、グリフィスやパス（Octavio Paz）、マクウィリアムズ（Carey McWilliams）も共鳴している。Griffith, *American Me*, 44-45; Octavio Paz, *El laberinto de la soledad y otras obras* (New York: Penguin, 1970), 39; Carey McWilliams, *North from Mexico: The Spanish-Speaking People of the United States* (New York: Greenwood Press, 1968), 241.

<sup>20)</sup> Villarreal, *Pocho*, 150-53; Mario Suárez, “Kid Zopilote,” *The Arizona Quarterly*, 3 no.2 (Summer 1947): 130-37. 「キッド・ソピロテ」は、主人公ペペが出稼ぎ先のロサンゼルスでパチューコになってアリゾナ州トゥーソンに帰ってくると、周囲のメキシコ系米国人たちから疎外される様子を描いた短編物語である。『ポチョ』と「キッド・ソピロテ」は「物語」であるものの、両方とも1940年代に著者がメキシコ系社会と関わった経験に基づいて執筆されている。そのためこれらの著作は、パチューコを取り巻く当時の社会状況を反映しているといえよう。なお、ホワイト（Hayden White）は、「歴史における物語性の価値」を詳述している。ヘイドン・ホワイト著、海老根宏・原田大介訳『物語と歴史』（《リキエスタ》の会、2001年）。

<sup>21)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 120.

<sup>22)</sup> Ramírez, “Crimes of Fashion,” 7.

お金を費やす余裕を持ち始めていた。<sup>23)</sup>しかし当時、多くの人は、儉約や自己犠牲を望ましいものと考えていたため、戦時中にもかかわらず娯楽を享受するパチューコを反社会的な集団とみなした。<sup>24)</sup>

バガンによると、中産階級以上の米国人は、貧しいはずのメキシコ系労働者階級の若者たちが、違法行為をせずに高価なスーツを買えるわけがないと考えていたという。また、戦時中であったため多くの家庭は共働きであり、親の監視が子どもに十分行き届かなかったのも不安の種であった。多くの人は、社会規範から逸脱したスタイルを身につけるパチューコが増えるにつれ、次第に彼らを犯罪やギャング活動と結びつけて考えるようになっていった。<sup>25)</sup>

ロサンゼルスにメキシコ系米国人社会内部でも、パチューコに対する不信感が高まっていた。グリフィスは、次のように指摘する。

スクエアの多くは、「アメリカ人」や「上流階級」メキシコ人たちと同じ理由でパチューコを軽蔑した——「彼らは、あのような身なりを恥じるべきだ。彼らは私たちにとって不名誉だ」——。スクエアは人を見下す態度をほとんど隠そうとしなかったため、パチューコは憤慨し、スクエアの傲慢さを嫌悪した——「彼らは自分たちをガバチョ (gabachos) だと思っている」——。<sup>26)</sup>

スクエアの中にはパチューコと付き合う人びとも存在したので、必ずしも両者が全面的に対立していたとはいえないかもしれない。しかし、上述のグリフィスの指摘から窺えるように、パチューコ以外のメキシコ系の多くは、パチューコを不名誉な存在とみなす傾向があったことは否めない。

### 3. メキシコ系米国人に対する排斥感情の高揚とスリーピー・ラグーン殺人事件

カリフォルニアの主流社会は、1850年代からメキシコ人の残酷さや犯罪性を繰り返し主張してきた。例えば、伝説的な人物ホアキン・ムリエタ (Joaquín Murieta) は、1850年代、カリフォルニアの新たな支配勢力であるアングロ系米国人から「残酷な盗賊」として恐れられていた。<sup>27)</sup>アングロ系がメキシコ人を犯罪者とみなす風潮はそれ以降も続くが、とりわけロサンゼルスにおいてこのような風潮が高まったのは、メキシコ人移民が急増した1920年代である。この時期、犯罪学の分野では、当時流行していた「科学的人種主義」に基づいて、貧困層のマイノリティ集団は犯罪にはしりがちである、という主張がなされた。この影響で、ロサンゼルス市警察は移民労働者に対する取り締まりを強化し、警察の

<sup>23)</sup> マニュエル・G・ゴンサレス著、中川正紀訳『メキシコ系米国人・移民の歴史』(明石書店、2003年)、313頁。

<sup>24)</sup> Ramírez, "Crimes of Fashion," 7.

<sup>25)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 121-22.

<sup>26)</sup> Griffith, *American Me*, 52-53。「ガバチョ」は米国において、メキシコ系米国人が英語話者のアングロ系米国人を指すさいに使用する名詞であるが、ここではスクエアをアングロ系に見立ててガバチョと呼んでいる。

<sup>27)</sup> 同時にムリエタは、カリフォルニアのメキシコ系社会では「アングロ系に抵抗した英雄」とみなされている。

メキシコ系米国人に対する嫌がらせが次第に日常化していった。<sup>28)</sup>同時に新聞や雑誌も、徐々にメキシコ系による犯罪を報道するようになった。こうしてロサンゼルスでは、メキシコ系米国人の暴力的なイメージが1920年代あたりから次第に広まっていった。<sup>29)</sup>そして第二次世界大戦に突入し、真珠湾攻撃が起こると、ロサンゼルスの人びとは外部からの奇襲攻撃の可能性に敏感になり、移民集団への排斥感情を強めていった。

真珠湾攻撃から間もない1942年8月2日、スリーピー・ラグーン殺人事件が発生すると、ロサンゼルスの人びとはメキシコ系のズート・スターに対する不安感を一層募らせた。この殺人事件は、スリーピー・ラグーンと呼ばれる貯水池の近くで、米国育ちのメキシコ人青年ホセ・ディアス (José Díaz) が何者かの暴行により殺害された事件である。スリーピー・ラグーンは、近隣に住むメキシコ系の人びとが、日中はプールとして、夜はデート・スポットとして利用する場所であった。ロサンゼルス市警察は、殺人事件当日からロサンゼルスのバリオ (メキシコ系米国人労働者階級の居住地区) を捜索し、容疑者と目されるメキシコ系の若者を片端から逮捕していった。8月10日までに逮捕者数は300人を越え、ロサンゼルス史上最大の一斉逮捕となった。中でも38番街に住んでいたズート・スターの「ギャング」たち22人 (メキシコ系21人、アングロ系1人) は、十分な証拠がないにもかかわらず、殺人事件発生当日スリーピー・ラグーンを訪れていたというだけの理由で、殺人容疑で起訴された。<sup>30)</sup>

当時、ロサンゼルスという大都会において、喧嘩が原因で1人の青年が死亡するような事件は特別なものではなかった。しかし、スリーピー・ラグーン殺人事件が発生して以降、新聞や雑誌はそれまであまり注目をしてこなかったパチューコの犯罪を、集中的かつ過激に報道するようになった。<sup>31)</sup>これに伴い、ロサンゼルスの人びとは次第にパチューコを「ギャング」とみなすようになっていった。スリーピー・ラグーン殺人事件は、多くのアングロ系が以前から抱いていた「メキシコ系=犯罪者」というイメージに見事に合致していた。また、1942年2月に日系米国人が強制収容所へ連行されて以降、排斥の対象はメキシコ系米国人へと移っていた。こうして、戦時下にあったロサンゼルスの人びとは、ズート・スーツを着た非行青年たちが増加し、社会の治安が悪化することを極度に恐れるに至ったのである。<sup>32)</sup>

スリーピー・ラグーン殺人事件の刑事裁判は、今日からみれば、極めて人種差別的な先入観に支配された雰囲気の下で開始されたといえる。例えば公判のさい、起訴された青年たちはあらためて整髪することも、新しい服装に着替えることも許されなかった。被告側

<sup>28)</sup> Escobar, *Race, Police, and the Making of a Political Identity*, 105.

<sup>29)</sup> Ibid., 104-31.

<sup>30)</sup> SLDC, *The Sleepy Lagoon Case*, 7, SLDC Records, box2, folder3.

<sup>31)</sup> "11 Mexican Youths Indicted in Gas Station Stabbing," *Los Angeles Daily News*, October 9, 1942; "Gang Attack Spread: 75 Zoot Suit Youths Arrested for Melee Near Dance Hall," *Los Angeles Wilshire Press*, October 29, 1942; "Ten Seized in Drive on Zoot Suit Gangsters," *Los Angeles Times*, November 2, 1942; "Gooners," *Los Angeles Herald Examiner*, November 4, 1942.

<sup>32)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 91-97. ホルトンは、1941年にはメキシコ系による青年犯罪が増加したものの、戦争に突入してからはその数が減少したことを報告している。パチューコを犯罪にはしりやすい集団とみなす当時の認識は、誇張されたものであったといえよう。Karl Holton, "Delinquency in Wartime," 1, SLDC Records, box4, folder11.

の弁護士ジョージ・シブリー (George Shibley) の主張によると、これは「少年たちを意図的にたちの悪い集団やギャングとして見せかけ、奇抜な外見につけこもうと」する検察側の戦略であったという。<sup>33)</sup>

また、検察側の陳述で、ロサンゼルス郡保安局のエドワード・デュラン・エアーズ (Edward Duran Ayres) は次のように述べている。

白人、特にアングロサクソン人の若者たちは、喧嘩のさい、こぶしで殴りあったり蹴りあったりすることは好まない。しかしメキシコ人の一団は、それを弱さと考え、ナイフや凶器を使用したい衝動に駆られる。つまり、彼らの抱く欲望は相手を傷つけ、殺すことである。したがって、アングロサクソン人には先住民の心理を理解することが困難であり、ラテン人にはアングロサクソン人や北ヨーロッパ人の心理を理解することが困難である。<sup>34)</sup>

法廷では、このようにメキシコ人やメキシコ系を「生まれつき犯罪にはしりやすい集団」とみなす陳述が繰り返し行われた。そして1943年1月、決定的な証拠がないにもかかわらず、殺人容疑者22人の青年のうち3人が第一級殺人罪で無期懲役、その他9人が第二級殺人罪で懲役5年、5人が脅迫罪で懲役1年の判決を受けた。<sup>35)</sup> この青年たちは、公正な裁判を受ける権利を剥奪され、冤罪に処せられたといえよう。

裁判終了後も、パチューコへの反感は収まらなかった。一部では、パチューコとメキシコのファシズムの政党であるシナルキスタ全国同盟 (Unión Nacional Sinarquista) とが共謀して、米国を混乱状態に陥れようとしているのではないかと噂されていた。<sup>36)</sup> このような社会状況の中、ダウントウン周辺のバリオでは、海兵隊員とパチューコの対立が次第に深まっていった。

#### 4. 引き裂かれたズート・スーツ

##### (1) 海兵隊員とパチューコの対立

1940年代、ロサンゼルス・ダウンタウンの北部に位置するテンプル通り、アルパイン通り、チャベス・ラヴィーン地区の周辺には、様々な人種・民族の労働者が住んでいた。特にチャベス・ラヴィーンは、メキシコ系米国人の居住者が全体の70%を占め、生活環境が劣悪なバリオであった。<sup>37)</sup> 戦争開始後、このチャベス・ラヴィーンには海軍施設が建てられた。<sup>38)</sup> これにより、以前は見られなかったアングロ系の海兵隊員がこの地区に出現し始めた。<sup>39)</sup>

当時、バリオに居住していたメキシコ系の若者たちのアイデンティティは、「38番街の

<sup>33)</sup> SLDC, *The Sleepy Lagoon Case*, 21, SLDC Records, box2, folder3.

<sup>34)</sup> Ibid., 16.

<sup>35)</sup> Ibid., 27-28. 第二級殺人罪に処せられたうちの1人は、アングロ系米国人の青年である。

<sup>36)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 140.

<sup>37)</sup> Ibid., 149.

<sup>38)</sup> Ibid., 146.

<sup>39)</sup> ほとんどの海兵隊員は18-20歳のアングロ系である。Ibid., 147.



若者たち」などのような地理的な境界線と強く結びついていた。<sup>40)</sup>そのため、以前からバリオに居住してきたメキシコ系の若者たちは、「自分たちの縄張り」とでも言うべき場所に突如現れたアングロ系の若者たちを、快くは思わなかった。また、海軍施設が建設されると、長年続いてきた社会交流が途絶えたり、それまで住んでいた土地を手放したりしなければならなかった。そのため、住人の多くも海軍施設の建設を疎ましく思っていた。さらに海兵隊員は、バリオの住人に対して横暴な態度を取っていた。一般には、このような兵士の行為は、彼らが国のために戦っているがゆえ大目にみられることが多かったようである。<sup>41)</sup>しかし、メキシコ系の若者たちは「自分たちの縄張り」における海兵隊員の横暴な態度を許すことができなかった。

メキシコ系男性と海兵隊員の間では、女性をめぐる対立もみられた。グリフィスは、流行のファッションを着飾ったパチューカ (pachuca、パチューコの女性名詞) たちが、多くの男性に性的魅力を感じさせる集団であったと述べている。<sup>42)</sup>アングロ系の海兵隊員は、このようなパチューカに欲望のままなぞしを向け、性的嫌がらせを繰り返した。逆に、メキシコ系の男性がアングロ系の女性に性的嫌がらせをする場合もあった。<sup>43)</sup>こうして、メキシコ系の男性と海兵隊員は、自分たちの「縄張り」や「女性」をめぐり対立を深めていった。<sup>44)</sup>

オブregon・バガンによると、メキシコ系米国人の若者は、バリオにいる海兵隊員をよく罵ったという。罵りの内容は、おおまかに二種に分けることができる。第一は、兵役を免れる方法があったのにもかかわらず海兵隊員になった彼らは馬鹿である、と愛国心を批判するものである。第二は、海兵隊員を男らしさに欠ける者として揶揄するものである。<sup>45)</sup>海兵隊員は、このようなメキシコ系男性の態度に耐えることができなかった。スリーピー・ラグーン殺人事件が発生してから1943年春にかけて、それまであまりみられなかったメキシコ系青年と海兵隊員の衝突は日常茶飯事になっていた。<sup>46)</sup>もはや、メキシコ系米国人の反抗的な態度に対する海兵隊員の苛立ちは、限界に達していた。

## (2) ズート・スーツ暴動の勃発

最初の暴動が発生した1943年6月3日の夕方、ズート・スーツを着たメキシコ系の若者たちは、海軍施設に戻ろうとしていた海兵隊員たちに向かって「ヒトラー万歳」と言い放ったり、侮辱的な言葉を浴びせたりした。<sup>47)</sup>このようなメキシコ系の言動は、多くの海

<sup>40)</sup> Ibid., 152.

<sup>41)</sup> Luis Alvarez, "Zoot Violence on the Home Front: Race, Riots, and Youth Culture during World War II," in *Mexican Americans & World War II*, ed. Maggie Rivas-Rodriguez (Austin: University of Texas Press, 2005), 157; "Mexican Boy Gangs," 3, SLDC Records, box4, folder8.

<sup>42)</sup> Griffith, *American Me*, 47.

<sup>43)</sup> Obregon Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 157-58.

<sup>44)</sup> 海兵隊員のセラー服とパチューコのズート・スーツ（主に暗い色が中心）も、両者の対立を象徴的に表していたといえる。

<sup>45)</sup> Obregon Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 159.

<sup>46)</sup> Ibid., 160; "Pachuco Gangs Tangle in New Street Brawls with Navy: Cry 'Death to Cops,'" *Long Beach Independent*, June 8, 1943.

<sup>47)</sup> Obregon Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 169.

兵隊員にとって挑発的なものであった。一方、海軍施設には、ダウンタウン近くでズート・スターが大勢集まっている、という情報が入ったため、軍関係者は警戒していた。<sup>48)</sup> 彼らは「メキシコ人による犯罪の波」に不安を募らせていたため、メキシコ系の行動に敏感になっていた。また多くの海兵隊員は、警察にはメキシコ系による悪質な犯罪を防止する能力がないと感じていた。そのため彼らは、ロサンゼルス社会の秩序を守るべく自警団の役割を自ら買って出た。

暴動が起きたときの緊迫した様子を、当時ズート・スーツを着ていたメキシコ系青年ダニー (Danny) は、次のように述べている。

僕たちはレッドカー (red car)<sup>49)</sup> に乗ってロサンゼルスに帰る途中だった。駅に到着する前から、ダウンタウンでは今までにない大事件が発生していることに気づいていた。[中略]路面電車の中の人びとは、暴動について話したり新聞を読んだりしている。道端で新聞を販売している子どもたちは、実際の戦争ではなく海兵隊員・ズート・スーツ戦争について叫んでいる。[……] ——ロサンゼルス全域に拡散するズート・スーツ・ギャングの巣——これは彼 (ダニーの友達、ミンゴ Mingo) が持つ『ヘラルド』紙の表題だった。市長と警察のズート・スーツ・ギャングに対する姿勢が厳しくなっていることも、以前から聞いていた。ミンゴが僕を見た。「これ、僕たちのことだよね? 僕たち、ドレイブ<sup>50)</sup>を着ているしメキシコ人だよ。ギャングだって!」(括弧内筆者)<sup>51)</sup>

1940年代当時、ダニーやミンゴのようにメキシコ系のズート・スターの多くは、自らをギャングとして認識していなかった。しかし、周囲の人びとからそうみなされた彼らは、知らぬまに海兵隊員が起こした暴動へと巻き込まれていった。

6月3日の夜、海軍施設にいた50人程の海兵隊員は、空き瓶、ベルト、こん棒、鉄パイプなどを持ち、ダウンタウンに向けて出発した。<sup>52)</sup> ダウンタウンに到着するや、彼らはカフェやバー、レストラン、映画館などに押し入り、ズート・スターたちを手当たり次第に襲い始めた。海兵隊員たちは、彼らのズート・スーツを引き裂き、ダック・テイルの髪をはさみで切るなどの暴行に及んだ。攻撃されたズート・スターは、主にメキシコ系とアフリカ系の少年たちであった。<sup>53)</sup> 12-13歳の男子も攻撃の対象となったが、女性のほとんどは攻撃されなかった。<sup>54)</sup> それまで発生していたメキシコ系男性と海兵隊員の対立の多くは、それぞれの女性を守るための「男同士」の抗争であり、暴動もその延長線上で勃発したのであった。<sup>55)</sup>

<sup>48)</sup> Ibid., 168.

<sup>49)</sup> 路面電車のこと。

<sup>50)</sup> ズート・スーツの別名。

<sup>51)</sup> Griffith, *American Me*, 3.

<sup>52)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 169; Griffith, *American Me*, 8.

<sup>53)</sup> 被害者の中には、ロシア系の若者もいた。“Zoot Suit War,” *Time*, June 21, 1943.

<sup>54)</sup> Alvarez, “Zoot Violence on the Home Front,” 155.

<sup>55)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 170-71.

ある海兵隊員は、こう述べる。「僕たちは、警察がやり損ねていることをしているだけだ。一般の人びとと僕たちが安心できるまで、彼らをやっつけるつもりだ。」<sup>56)</sup>警察も軍も民間人も、誰もズート・スーターに対する海兵隊員の攻撃を止めなかった。また、多くの新聞は、海兵隊員の行為を擁護する報道を行った。<sup>57)</sup>海兵隊員による暴動は2日目以降、ダウンタウンからロサンゼルス東部にまで広がり、暴動への動員数も次第に増していった。

暴動発生から5日目の6月7日、事態は最悪の状態に陥った。ダウンタウンには、ロサンゼルス市内外の陸軍兵士や海兵隊員など約5千人が押し寄せたのである。<sup>58)</sup>これらの兵士に加え、民間人も暴動に参加した。暴動の間、外出を控えるメキシコ系米国人もいたが、仲間を助けるためにダウンタウンに向かった者もいた。連日の暴動により、海兵隊員たちの攻撃は、ズート・スーツを着ていないメキシコ系の若者たちにまで及んでいた。アングロ系の兵士たちは、クラブや映画館にとどまらず、民家にまで侵入してメキシコ系米国人男性を攻撃したのである。

暴動が始まってから5日間、ロサンゼルスは無秩序状態だった。しかし、7日の午後10時30分、それまで事態を静観していたロサンゼルス市警察が初めて警報を発令し、暴動に関わった海兵隊員と民間人の逮捕に踏み切った。<sup>59)</sup>これによって、8日の朝までに暴動は鎮圧された。この日の暴動だけで民間人94人と兵士18人が負傷し、そのうち民間人全員と兵士2人が逮捕された。<sup>60)</sup>幸い、死者はなかった。

1943年6月9日、ロサンゼルス市議会は、暴動の発端となったズート・スーツが公序良俗に反するとして、その着用を禁止した。<sup>61)</sup>それ以降もメキシコ系男性に対する兵士の攻撃は散発的に発生したが、事態は徐々に終息へと向かっていった。<sup>62)</sup>

### (3) 暴動の意味

海兵隊員たちがメキシコ系を中心とする若者たちのズート・スーツを引き裂いた理由は何であったのか。パチューコは、独自のスタイルを身につけることで、アングロ系米国人と親の世代のメキシコ人への対立感情を表していた。そして、パリオに海兵隊員が出現し始めるや、彼らは自分たちの縄張りや女性をめぐる海兵隊員と対立した。つまり、ズート・スーツ暴動は、アングロ系とメキシコ系の間での人種・民族・階級・ジェンダーをめ

<sup>56)</sup> "Sailors Take Matters into Own Hands: Stage Attacks on Zoot Suit Gangs," *Long Beach Independent*, June 5, 1943.

<sup>57)</sup> Alvarez, "Zoot Violence on the Home Front," 160.

<sup>58)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 179.

<sup>59)</sup> "Riot Alarm Sent Out in Zoot War," *Los Angeles Times*, June 8, 1943.

<sup>60)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 180. 6月3日から約一週間続いた暴動全体では、150人以上の負傷者と500人以上の逮捕者が出た。*The Troy Record*, June 10, 1942. 暴動の被害にあったメキシコ系米国人少年全体の98%は、米国生まれであった。"Mexico General Offers Aid in Zoot Inquiry," *Los Angeles Times*, June 17, 1943.

<sup>61)</sup> Mauricio Mazón, *The Zoot-Suit Riots: The Psychology of Symbolic Annihilation* (Austin: University of Texas Press, 1984), 75.

<sup>62)</sup> "Clashes Few as Zoot War Dies Down," *Los Angeles Times*, June 11, 1943.

ぐる対立から生じたということが出来る。この点を、オブregon・パガンは以下のように説明している。

ズート・スーツは、表面上、消費文化を享受する若者たちが楽しむことのできる1つの象徴だった。しかしながら、同時にそれは、犯罪性や破壊性を想起させるような象徴であり、次第に人種・ジェンダー・階級の境界を曖昧にしていった。したがって、ズート・スーツを破壊することは、労働者階級の若者の中で芽生えた経済的豊かさという公的な象徴を破壊することを意味した。それは、人種隔離されたロサンゼルスの子白人の若者に彼らの居場所を気付かせるための権力の誇示であり、アメリカ主流社会との違いを表すサインを消去するための行為であった。<sup>63)</sup>

パチューコにとって、高価で派手なズート・スーツを身につけることは、自分たちを中産階級の米国人とも親の世代であるメキシコ人とも違う「メキシコ系米国人」として米国社会の中に位置づける行為であった。<sup>64)</sup>しかし、戦時下にあったロサンゼルスの人びとにとって、社会規範から逸脱したスタイルを身につけるパチューコは、市民の結束を乱し、既存の権力を脅かす存在であった。そのため、アングロ系の意見を代弁する海兵隊員たちは、自分たちと対極にある集団の象徴（ズート・スーツ）を引き裂くことで、メキシコ系米国人労働者階級の若者たちを本来あるべき米国社会のヒエラルキーのうちに（裸の若者たちが原始的なメキシコ人像と重なるように）強制的に位置づけようとしたのである。

メキシコ系米国人労働者階級の若者たちは、ズート・スーツ暴動によって、初めて米国社会全体から注目を浴びることになった。<sup>65)</sup>そしてこの暴動以降、アングロ系米国人がメキシコ系米国人若者男性を「犯罪にはしりやすい集団」とみなす傾向は強まった。<sup>66)</sup>つまりズート・スーツ暴動は、米国社会において、メキシコ系の若者が〈アメリカ人〉であるにもかかわらず「非〈アメリカ人〉的な存在」として一括される、という今日まで続く「人種化」のプロセスの一部として位置づけることができよう。<sup>67)</sup>

## おわりに

ズート・スーツ暴動は、多くのメキシコ系米国人にとって屈辱的な出来事だった。しかしその頃、スリーピー・ラグーン裁判は解決へと向かっていた。裁判が始まった1942年から、公平な裁判を受けることができないメキシコ系の青年たちを救済する活動が行われていたのである。

この活動を率先したのは、共産党員ラルー・マコーミック (LaRue McCormick) である。公判が始まった当初、それを傍聴していたマコーミックは、青年たちの公正な裁判を求めて「メキシコ系米国人青年擁護市民委員会」(Citizens' Committee for the Defense of

<sup>63)</sup> Obregon Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 185.

<sup>64)</sup> Paul Fitzgerald, "Interview with George Shibley," *Forum*, 6, no.4 (1989): 7.

<sup>65)</sup> McWilliams, *North from Mexico*, 242.

<sup>66)</sup> Escobar, *Race, Police, and the Making of a Political Identity*, 287.

<sup>67)</sup> 村田『〈アメリカ人〉の境界とラティーン・エスニシティ』、46頁。

Mexican-American Youth、以下CCDMAY)を設立した。CCDMAYは公判期間中の団体名であり、公判終了後は団体名を「スリーピー・ラグーン弁護委員会」(Sleepy Lagoon Defense Committee、以下SLDC)へと改称した。<sup>68)</sup> CCDMAY発足当初、多くのメキシコ系米国人はこの団体に非協力的であった。彼らは、長年政府機関による強制送還の脅威に曝されていた上に、パチューコをメキシコ系社会の恥としてみなしていたのである。<sup>69)</sup> しかしCCDMAY・SLDCは、次第にメキシコ系社会内外から多くの支持を得るようになり、再審のための募金活動などを積極的に展開した。<sup>70)</sup> その結果1944年10月、有罪判決を受けていた青年たちは全員無罪となった。<sup>71)</sup> SLDCの一員であったガイ・S・エンドア(Guy S. Endore)は、このときの様子を次のように伝えている。「米国の民主主義と正義の勝利に、全員が今歓喜している。」<sup>72)</sup> 青年たちが釈放されたとき、裁判所の前では250人以上もの人びとが彼らを出迎え、1時間以上そこで喜びを分かち合っていた。<sup>73)</sup> 以来、スリーピー・ラグーン殺人事件は、ロサンゼルスにメキシコ系社会を「初めて効果的に結集させた」重要な事件として、メキシコ系米国人史の中に位置づけられている。<sup>74)</sup>

スリーピー・ラグーン殺人事件をめぐる一連の動きは、1970年代にバルデスをはじめとするチカノ知識人たちが、パチューコに自らのエスニシティのルーツを求めた理由を考察するうえで重要な手がかりを提供してくれる。この理由の1つとしては、当時のパチューコたちが反社会的で独特のスタイルを身につけていたことが挙げられるだろう。しかし、特徴的なスタイルだけが理由ならば、チカノ以外の人種・民族集団も自らのルーツを40年代のズート・スーターに求めることができたはずである。1940年代のパチューコは、他の人種・民族のズート・スーターとは異なる社会状況に直面していた。そして、その異なる社会状況とは、スリーピー・ラグーン殺人事件で冤罪になったパチューコや彼らを弁護した人びとが、法的闘争を通じて合法的に無罪を勝ち取ったことであった。独自のスタイルばかりではなく、この成果により、1970年代のチカノ知識人は、自らのエスニシティのルーツを1940年代のパチューコに求めたといえよう。

また、パチューコがチカノのルーツとなりえた理由を考えるうえでは、暴力という点にも配慮したい。バルデスが『ズート・スーツ』において、抑圧の犠牲になっているパチューコの状況を「1942年か、それとも1492年か」と問うたのは、偶然ではない。スリーピー・ラグーン殺人事件とズート・スーツ暴動は、アングロ系米国人の暴力によって精神的・肉体的に「根絶やし」にされようとしたメキシコ系米国人の記憶を呼び起こす事件であった。これにより、バルデスは、スペイン人によるラテンアメリカ諸国の暴力的な植民地支配が始まったとされる1492年とパチューコの状況を重ね合わせたのであろう。多くの

<sup>68)</sup> Barajas, "The Defense Committees," 41.

<sup>69)</sup> Ibid., 43-44.

<sup>70)</sup> この運動を推進した人には、ホセフィナ・フィエロ・デ・ブライト (Josefina Fierro de Bright) やルイサ・モレノ (Luisa Moreno) といった当時のラテン系移民社会のリーダーやマクウィリアムズ、ハリウッド映画俳優などがいた。Guy S. Endore, "Victory for Democracy," 4, SLDC Records, box2, folder3.

<sup>71)</sup> Obregón Pagán, *Murder at the Sleepy Lagoon*, 85; Barajas, "The Defense Committees," 56.

<sup>72)</sup> Endore, "Victory for Democracy," 4, SLDC Records, box2, folder3.

<sup>73)</sup> "Sleepy Lagoon Case Dismissed on October 23," SLDC Records, box1, folder1.

<sup>74)</sup> ゴンサレス 『メキシコ系米国人・移民の歴史』、316頁。

チカノにとっては、米国において「根こそぎと根絶やしのさいに行使された暴力の記憶」こそが、忘却してはならない自らのエスニシティのルーツであった。<sup>75)</sup>ここに、バルデスをはじめとする1970年代のチカノたちが、ビジャヤサパタといったメキシコ革命の英雄たちではなく、自分たちの先人としてカリフォルニアの地で苦しんだメキシコ系米国人のパチューコに自分たちのルーツを求めたことの大きな意義があったといえよう。

---

<sup>75)</sup> 小森陽一『レイシズム』（岩波書店、2006年）、30頁。